

7 二十世紀前半における京都・岩倉の “国際化”について(その一)

橋 本 明

京都・岩倉は精神障害者の家庭看護の里として中世から知られていた。時代はくだり二十世紀になるとその名は国外にまで及び、国外からの訪問者も迎えることとなるのだが、この“国際化”の過程について検討してみたい。

岩倉の国際化は、まずゲール(Geel)との類似性の認識が起点となる。この類似性を最初に指摘したのが呉秀三である。ベルギー・ゲールにおける精神障害者の家庭看護は、中世の宗教的儀式および十九世紀の近代化を経て、二十世紀初頭には開放的な治療法として欧米からの注目もピークに達していた。呉は、欧州留学をほぼ終える頃、一九〇一年にゲールを訪問した。当時は法令によりゲール・コロニーの訪問は当局の許可が必要であり、

ゲールに保存されている訪問許可者の名簿 (Registre des permis de visiter l'établissement) で最初に登場する日本人が呉秀三である。

ところで、岩倉の精神障害者の家庭看護は、近代医学からは時代錯誤視され、一九〇〇年の精神病者監護法では違法とみなされ、存亡の危機にあった。一方、一九〇一年一〇月末に帰国した呉は、翌年の国家医学会例会でゲールを早速紹介した。ここで彼は国際的動向を巧みに捉えながら岩倉を再解釈し、岩倉再興を望んだのである。呉の発言の直接的な影響力は必ずしも明らかではないが、この時期以降、岩倉病院の院長・土屋栄吉のリーダーシップのもと、岩倉はゲールと同一平面上にあるという認識がなされ、その再生のきっかけをつかんでいた。

だが岩倉の国際化にとって、外国人による言及も不可欠であった。その際、珍重された人物がロシア人医師 スチーダ (Wilhelm Stieda) である。彼は一九〇六年一月に岩倉を訪問し、同年ドイツの *Centralblatt für Nervenheilkunde und Psychiatrie* に *Ueber die*

Psychiatrie in Japan」という論文を発表し、岩倉を「日本のゲール」として紹介した。この論文によれば、「短い滞在期間であり、駆け足ではあるが日本の精神医学についても概観しておきたかった」という理由で、呉秀三、今村新吉の便宜にあずかり、東京と京都の精神病院を見学した。この時、日本側から「日本のゲール＝岩倉」という説明がなされてその訪問を勧められたと考えるのが自然であろうし、「日本の精神医学についても (auch in die psychiatrischen Verhältnisse des Landes)」という記述から、来日の目的が他にもあったことが示唆される。これ以上の彼の素性は不明であったが、わずかの手がかりをもとにインターネットでの検索を繰り返し、最終的にはスチーダの子孫たちとメールを交換しながら、スチーダの輪郭が浮かび上がった。スチーダは一八七五年生まれのバルト系ドイツ人で、ペテルスブルクに学び、主として現在のラトヴィア(当時はロシア領)の精神病院などを拠点にして活躍した医師である。ハイデルベルクに留学の後、日露戦争の際に予備軍医となり、一九二〇年に死去している。あくまで推測だが、スチーダには軍

医としてロシア軍捕虜が残る日本各地の収容施設を訪問する目的があったのではなからうか。一九〇五～〇六年頃のわが国の新聞記事によれば、戦後処理を目的とするロシア医師団の来日は頻繁に行われていた様子が伺われる。ところで先のスチーダ論文がドイツの雑誌に発表されたのが一九〇六年七月一日で、岩倉の名を海外にもたらした端緒と考えられる。邦訳が早くも同年一〇月五日の『神経学雑誌』に掲載され、日本国内における「日本のゲール＝岩倉」という図式はここで確認されたといってよからう。このようにスチーダは、呉秀三の意図を実現するかのような役回りをし、岩倉の国際化と深く結びついて記憶にとどめられることになった。

(愛知県立大学)